

＜第5回 横浜市文化財施設のあり方検討委員会 議事録＞

日時	平成23年12月22日(木) 10時00分～12時00分
場所	松村ビル別館 502会議室
開催形態	公開
出席者 (敬称略)	<p>【委員】 澤野由紀子(聖心女子大学文学部教授)、嶋田昌子(横浜シティガイド協会副会長)、 末崎真澄((財)馬事文化財団理事・馬の博物館学芸部長)、 永池啓子(横浜市立小学校長会代表)、長島由佳(横浜市PTA連絡協議会会長)、 西野公晴(中小企業診断士)、平川南(国立歴史民俗博物館館長)、 吉田鋼市(横浜国立大学大学院教授)</p> <p>【事務局】 鈴木(生涯学習担当部長)、中田(生涯学習文化財課長)、重松(文化財係長)、 天野(文化財係)、</p> <p>【公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団】 高村(理事長)、金子(副理事長)、竹前(事務局長)、鈴木(横浜市歴史博物館館長)、 上山(横浜開港資料館館長)、平野(横浜市歴史博物館副館長)、 西川(横浜開港資料館・横浜都市発展記念館副館長)、井上(横浜ユーラシア文化館副館長)</p> <p>【コンサルタント】 山路商事(株) 田代</p>
欠席者 (敬称略)	鈴木眞理(青山学院大学教育人間科学部教授)、 桧森隆一(嘉悦大学経営経済学部教授・副学長)
議題	1 前回の報告 2 横浜市文化財施設のあり方検討委員会 提言について 3 意見交換 4 その他
資料	資料 第4回 横浜市文化財施設のあり方検討委員会 議事録 資料 横浜市文化財施設のあり方検討委員会 提言(まとめ案) 資料 今後の横浜市の文化財施設の方向性(イメージ図) 資料 横浜市文化財施設のあり方検討委員会【資料編】(案)

<会議の開催>

事務局から、以下のとおり事前確認があった。

- ・会議開催の確認。(本日委員8名出席のため、委員の過半数が出席しており、横浜市文化財施設のあり方検討委員会設置要綱第6条を満たす。)
- ・会議公開の了承。(会議は原則公開とする。)
- ・本日は当検討委員会の最終回と考えており、まとめへ向けて議論を進めて頂きたい。

■主な議事内容

1 前回の報告

(吉田委員長)

- ・議事録について、各委員は事前に確認を行っていると思うが、修正等の要望があれば申し出て頂きたい。

<修正事項等>

- ・特に異論なく、了承された。

(事務局)

- ・前回議事録と併せて、「平成21年度横浜市文化財施設指定管理者外部評価委員会評価報告書」を送付させて頂いた。適宜参考として頂きたい。

2 横浜市文化財施設のあり方検討委員会 提言について

(吉田委員長)

- ・「横浜市文化財施設のあり方検討委員会 提言(まとめ案)」に沿って議論を進めていくこととする。前回までの各委員の意見が、概ね反映されたものとなっている。事務局から章毎に説明を行って頂き、議論を進めていくこととする。

事務局から、第1～3章について説明を行った。

(事務局)

- ・各委員から頂いた意見をもとに、「今後の横浜市の文化財施設の方向性(イメージ図)」を作成した。議論の参考として頂きたい。

<質疑応答>

(吉田委員長)

- ・「横浜市文化財施設のあり方検討委員会【資料編】(案)」について、内容は全て当検討委員会で提示された資料か。提示されていない資料が掲載されているか。

→全て当検討委員会で提示した資料である。(事務局)

(吉田委員長)

- ・当検討委員会の議事録は「提言」「資料編」のどちらに掲載するのか。

→議事録はホームページ等で公開し、「提言」「資料編」には掲載しない。(事務局)

3 意見交換

《第1章》

(吉田委員長)

- ・第1章について、修正等の要望があれば申し出て頂きたい。

<修正事項等>

- ・特に異論なく、了承された。

《第2章》

(吉田委員長)

- ・第2章について、修正等の要望があれば申し出て頂きたい。

<修正事項等>

- ・特に異論なく、了承された。

《第3章》

(吉田委員長)

- ・第3章について、修正等の要望があれば申し出て頂きたい。

1 文化財施設に求められる意義

(末崎委員)

- ・外郭団体等経営改革委員会でも指摘されていた、「費用対効果や集客という視点からの改善を求められていることにも留意する必要がある」といったことも謳っており、大事なことである。私はいいと思う。

(澤野委員)

- ・「閑古鳥が鳴いては」という表現は相応しくない。

(西野委員)

- ・「利用者が極端に少なくは」と表現を修正してはどうか。

(吉田委員長)

- ・「閑古鳥が鳴いては」という表現を修正することとする。

2 横浜市の文化財施設に求められる役割

(平川委員)

- ・常設展示や企画展示という言葉が度々出ており、一般的にも使用されている。しかし、どの博物館においても常設展示という言葉が、一度展示したものが変わらないというマイナスイメージを持っている。常設展示であっても展示替え、或いは可動性を持たせ、いつ来てもどこか展示が変わっているということが、リピーターを呼び込む大きな要因になる。博物館の場合、常設展示は開館して数年経過すると入館者が減っていく。企画展示で入館者を増やしていこうとするが、企画展示を年間6～7本も開催することが結果として館員の疲弊を生み、新鮮で意欲的な展示がだんだんと少なくなってしまうという傾向にある。そこで、常設展示ではなく、「総合展示」として考えるべきである。

(吉田委員長)

- ・現在、博物館では常設展示という表現は使用されない傾向にあり、常設展示という表現は「総合展示」へと改めるべきということか。

(平川委員)

- ・その通りである。当検討委員会では、これからの横浜の文化施設4館のあらゆる面での改革について議論を行っている。よって、当検討委員会が起点にならなければなら

ない。常設展示という表現は様々な部分で定着しているため、改めることは難しいだろうが、当検討委員会での検討を機に改めなければ、いつまでもこのままであろう。

(吉田委員長)

- ・「総合展示」という表現は、企画展示等も全て含まれてしまうのではないか。

(平川委員)

- ・博物館では、通史的なものを通常「総合展示」と呼び、テーマを選んで期間限定でやるものを企画展示や特別展示と呼んでいる。現状どのお考えか、施設の意見も伺いたい。

(指定管理者)

- ・平川委員からの発言の趣旨は理解できる。しかし、常設展示という言葉が条例上でも使用されている等の問題もある。

(事務局)

- ・固定的な常設展示ではなく、可動式の常設展示へと変えた事例として、「横浜みなと博物館」がある。以前は可動性を持たない常設展示であったが、リニューアルに際し、什器も全て可動式とした。常設展示であってもテーマを決めて展示替えが行えるようになっている。什器を変えず展示内容の変更だけならば、現在の横浜ユーラシア文化館も行っている。固定的な常設展示ではなく、可動式の常設展示が必要という意味で、今後の展示リニューアルを考える上で大変重要だと考える。提言の中には、将来的に展示方法の改善を図ることを盛り込みたい。

(平川委員)

- ・可変性が重要である。

(吉田委員長)

- ・可変性について、どこかで明記できないか。

(事務局)

- ・「(5) また行きたくなるような文化財施設」の中で明記したい。

(平川委員)

- ・結局のところ、リピーターが来なければ常に新規の来館者を望むこととなるが、それは非常に困難である。一度来館された方が二度三度来てもらうためには、やはり可変性がある展示が必要になる。開館時に業者任せにすると、什器も大規模になり展示が固定されてしまい、館員が動かしようがない。ケースの中の展示を少く変えたとしても、見る側からは分からない。また、これだけ社会的な欲求と学術的進展があるにも関わらず、それを展示に反映できないのは、容易に改変できないことが大きな障害の一つとなっている。

(平川委員)

- ・いずれは常設展示という用語も改めて頂きたい。

(吉田委員長)

- ・(5) に明記することとする。

(長島委員)

- ・当検討委員会として提言を出すのであれば、(5) の「一人でも多くの市民に施設を利用していただき」という表現は表現が相応しくない。

(吉田委員長)

- ・表現を修正することとする。

(平川委員)

- ・「(6) 安全に資料を保管できる文化財施設」の内容は、物の保管を対象に記載している。もう一つ重要なことがあり、現在、東日本大震災の被害を受けて全国的に問題となっていることは、資料を情報化したものをどこに置くか、いかに守るかということである。今回の震災を受け、東北ではその問題が露呈した。データベースが一か所の場合、被災することで情報システムそのものが喪失してしまう危険性がある。そこで、情報の分散化が求められている。横浜にとって貴重な情報を横浜の中だけで保管しておくのではなく、あらゆる災害に備え、例えば他の自治体と提携し、関西や九州等へ分散しておかなければ、完全に失われてしまう。資料の情報化、分散化が重要である。

(吉田委員長)

- ・現物資料は横浜にあるが、情報化が重要ということか。また、情報（データ）の分散化とはどのような意味か。

(西野委員)

- ・情報を一ヶ所のサーバーだけに保管するのではなく、分散して保管することが重要であるということだろう。

(平川委員)

- ・その通りである。現在、東北大学では情報を東京や関西、九州へ分散化している。お互いに協力し合えば可能なことである。日本列島では、今後どこで災害が起きるか分からない。

(吉田委員長)

- ・情報化は少しずつ進んでいるところもあるようだが、更に進めて頂くことが必要である。

(平川委員)

- ・横浜開港資料館はかなり進んでいるようだ。

(末崎委員)

- ・横浜市の行政情報もバックアップはされているのか。

(事務局)

- ・横浜市の行政情報もバックアップが必要なため、体制を整備している。同様に、文化財施設の情報も一ヶ所ではなく、複数箇所でも保管していく。

(吉田委員長)

- ・情報化や情報のバックアップについて、各館ほどの程度終わっているのか、一応の区切りはついているのか、もしくはまだ途中なのか。

(指定管理者)

- ・まだ、全く進んでいない状況である。

(指定管理者)

- ・マイクロ化した資料が劣化し、それをいかに保管していくかという問題もある。

(平川委員)

- ・(6)には情報化の観点が入っていないので、資料の情報化と情報のバックアップを他

へ依頼すべき旨を追記する必要がある。また今後は、資料は全て情報化し、横浜市だけでなく全国に公開し、発信していくことも求められる。

(吉田委員長)

- ・(6)に、資料の情報化と保管情報のバックアップが重要であるとの旨を追記することとする。

(委員一同)

- ・特に異論なく、了承された。

(末崎委員)

- ・(6)では、外部倉庫の保管についての記載があるが、これは収蔵庫問題の解決に反映されるものである。横浜市では東日本大震災を受け、津波の想定を12mと設定したと聞いた。また、山手警察署からは、津波の際は馬の博物館は高台にあるため、災害時の本部となる等の話があった。この様なことも重要であり、今後考えていく必要がある。

(西野委員)

- ・(6)の内容からは、外部倉庫＝悪であるとの論旨にも受け取れる。しかし、12mの津波であれば港の倉庫は危険であり、高台の外部倉庫は意味を持つこととなる。

(末崎委員)

- ・沿岸部では塩害や湿気等についても考慮しなければならない。本来であれば、外部倉庫よりも博物館の近くにある方が災害時にも対応しやすいが、12mもの津波となるとどうすることもできない。

(吉田委員長)

- ・外部倉庫が悪いというわけではなく、博物館と一体である方が利便性も良く、安全性も高いということであろう。

(末崎委員)

- ・博物館と一体であれば、常に学芸員が近くにおり、展示替え等の際の移動経費も少なくてすむ。

(長島委員)

- ・東日本大震災では津波の被害が大きかったが、横浜で大地震が発生した場合、火災による被害が心配されている。外部倉庫かどうかに関わらず、津波や火災等、全ての災害から守られる保管状況が、求められるべきものである。現在は東日本大震災の記憶が強いため、津波や水害といった表現が用いられているが、地震による災害は火災や水害等があることを考慮すると、倉庫として何が一番重要かということに行きつく。その様なことを踏み込んで考えるべきであるし、ぜひ検討してもらいたい。

(吉田委員長)

- ・地震という用語に、火災も含まれているのだろうが、改めて「火災」という表現を追記するか。

(長島委員)

- ・火災が発生した場合、シャッター等は作動するようになっているのか。

(末崎委員)

- ・博物館であれば、ハロンガス等の設備もあるため、火災の確率は低いと思われる。

(吉田委員長)

- ・(6)は「地震や水害、火災などの」と「火災」を追記することで構わないか。また、単純に外部倉庫＝悪ではないということ、どの様に表現すべきか。

(事務局)

- ・外部倉庫を設けるよりも、博物館の中に収蔵庫があり学芸員が適正に管理する方が望まれる。できることならばその様にしたいという事である。外部倉庫が悪いわけではないが、学芸員が資料の研究をする際や、閲覧者が資料利用を申し出た際に外部倉庫まで資料を取りに行くわけにはいかない。収蔵庫が博物館の中、或いはすぐ近くであれば、学芸員の研究や利用者の閲覧もすぐに行うことができる。博物館の場合はハロンや二酸化炭素等の消火設備や燻蒸設備も整っているが、民間倉庫の場合はその様な設備がない場合もあり、ひどいものでは収蔵庫の棚も設置されていないような倉庫もある。その様な倉庫を借りる場合、設置に膨大な費用がかかってしまう。よって、博物館の中、或いはすぐ近くに収蔵庫を設ける方が、本来的な博物館の姿であるという意味で(6)は記載させて頂いた。

(吉田委員長)

- ・(6)には、「火災」を追記することとする。また、収蔵庫は利便性や安全性から博物館と一体的であるべきという旨を、もう少し明確に記載して頂きたい。

(西野委員)

- ・現在、横浜開港資料館の外部倉庫はどこにあるのか。
→大黒埠頭である。(事務局)

(永池委員)

- ・(1)～(6)の6項目は、今後の文化財施設のあり方の方向性を示す重要なものであると思いながら拝見していた。「(1) 横浜らしさを活かした文化財施設」は、非常に重要なキーワードである。教育の立場から、つくづく子どもたちに横浜らしさ、郷土を愛する心を学ばせる中で文化財施設を活用するという観点でよくまとめられているが、是非追記していただきたい言葉がある。(1)の5行目「こうした豊かな地域の歴史と国際性をあわせもつ「横浜らしさ」を博物館運営の中で活かしていくことが望まれる。」とあるが、よく小学校の教育の中で使用するのは「開いてきた」、絶えず国際性豊かになるために横浜が開いてきた「開かれた都市」、「進取の気概がある人たち」、つまりその向こうに人がいることを教育では大切にしている。歴史という言葉の中にも人は含まれているのだろうが、「開かれた都市として」、「進取の気概」など、言い過ぎかもしれないが、その様な人間のスタンス、横浜のスタンスがあり、国際性をあわせもつ横浜らしさとして頂きたい。

(吉田委員長)

- ・「開かれた」という言葉を追記して頂きたいということか。例えば、「こうした豊かで開かれた～」ということか。

(永池委員)

- ・その様な表現である。人が開いてきたということが伝わるような表現にして頂きたい。

(吉田委員長)

- ・(1)には、「開かれた」というような言葉を追記することとする。

(嶋田委員)

・「開かれた」という言葉よりは、「人々の努力」という意味言葉の方が相応しいのではないか。「豊かな地域の歴史」というのは非常に広い意味、縄文時代や弥生時代といった古代のことを指しており、一方で「国際性」は開港以降のことを指している。それに伴う、そうした歴史的な大きな流れ、人々の心意気というところと少しずれてしまうかもしれないが、その様な事を意味しているのではないか。

(吉田委員長)

・どの様な文章にするかは、検討することとし、例えば、「市民の努力で培ってきた、開かれた横浜らしさ」といった様な表現をすることとする。

3 今後の横浜市の文化財施設の基本的考え方

4 今後の横浜市の文化財施設の方向性

事務局から、3 今後の横浜市の文化財施設の基本的考え方、4 今後の横浜市の文化財施設の方向性についての説明を行った。

・ここで、西野委員から（案2）の内容が異なるとの指摘があり、再度説明があった。

(吉田委員長)

・（案2）は残したまま、図の内容を修正することとする。

→（案2）については、再度修正する。横浜都市発展記念館は横浜開港資料館へ移転し、旧市外電話局は横浜ユーラシア文化館と収蔵庫で利用する、という案にする。（事務局）

(西野委員)

・元々の考え方としては、横浜ユーラシア文化館には独自の理念があり、前回までの議論にあるように、それが様々な制約により非常に中途半端な状況になっていることが大きな問題であると考え。もし開館当時の理念が現在でも生き続けているならば、それを本来の姿に戻し、収蔵品について専門家の末崎委員や平川委員が貴重だと言われる通りならば、横浜ユーラシア文化館を活性化させる方法はないかということを考えるべきではないか。

(事務局)

・（案2）については、西野委員が発言された様に、横浜ユーラシア文化館が旧市外電話局の2～3階を利用しながら、本来の理念に沿った形で活動できるようにし、余ったスペースがあれば収蔵庫として有効に活用するといった理解で修正する。また、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館は（案1）（案3）（案4）と同じ形で構わないか。

(西野委員)

・結構である。

(事務局)

・各案のメリット・デメリットについては、各委員からの発言を元に記載している。

(西野委員)

・（案2）のデメリットとして、「施設再編成に係る経費に加え、新たな外部倉庫経費も必要となり、他の案に比して最も高額になる。」と記載されている。確かに、新たな外部倉庫が必要となる可能性は高いだろう。しかし「他の案に比して最も高額となる。」と記載されているが、誤解ではないか。（案4）が最も高額になるはずである。

(事務局)

- ・(案2)は、横浜ユーラシア文化館を機能強化するための経費も必要であり、その分の経費も含まれている。現在、横浜ユーラシア文化館は旧市外電話局の2階部分しか使用していない。

(西野委員)

- ・機能強化や移転に係る経費は、(案4)でも同じではないのか。少なくとも今の場所であるよりも、別の場所へ移転する方が経費は高額になるはずである。

(事務局)

- ・(案2)は、外部倉庫を借りる経費が必要となるが、(案4)であれば外部倉庫を借りずに済む。

(西野委員)

- ・前回の検討委員会では、横浜開港資料館の外部倉庫については350万円/年間を支払っているということであった。また、前回示された予算からすると、(案1)のためには初期投資が10億円かかる。前回資料2では、横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館へ移転させるのに、6億2,000万円かかると示されている。10年間で償却しようとしても、6,000万円/年間も経費が必要となる。6,000万円/年間もあれば、立派な倉庫を借りることができる。ただし、学芸員の方からすれば、博物館と収蔵庫が離れてしまうと不便であるということは理解できる。更に申し上げれば、(案2)(案5)「確実に入館者が増える保証はない。」と記載されているが、このことはどの案に対しても該当することである。

(事務局)

- ・(案1)は、横浜ユーラシア文化館が横浜市歴史博物館へ移転した場合に、学校利用により入館者が共に増加する。

(吉田委員長)

- ・(案1)には、「歴博・ユ文は、相乗効果による来館が期待でき、入館者がともに増加する。」と記載してある。(案2)「確実に入館者が増える保証はない。」、(案5)「入館者数増加に確実につながるとはいえない。」については、削除するのが適当である。

(平川委員)

- ・我々がメリット・デメリットの数だけを見て、判断するわけではない。そもそも当検討委員会においては、経営改革委員会で提言された問題を解決するのに、必ずしも施設の統廃合を伴うものではないということを考えなければならない。確かに今までの反省も含めて、必ずしも開かれていなかったであろうし、努力はしてきただろうが、施設の設置目的に沿った活動をしてこなかったという課題は挙げられた通りである。そういった課題を、ここで改めて検討し直す必要がある。一番大きい点として、横浜ユーラシア文化館はこれまで通りでは成り立たないだろう。先程の議論では「横浜らしさを活かした文化財施設」といった時に、真っ先に国際性のことが挙げられていたが、正に横浜ユーラシア文化館がこれから背負っていく大きな役割なのではないか。では、横浜ユーラシア文化館は何をもって国際都市横浜としての存在意義があるのか、このことは当検討委員会で何度も質問してきたが、まだ十分な回答は得られていない。そこを明確化することが求められる。それから横浜都市発展記念館と横浜開港資料館

については、時代区分だけでもこれまで明確化されていなかっただろうし、市民にとって理解しづらいものであった。このように、各館それぞれで改善案を出してやっていく、つまり（案5）であるが、そういう案も有り得るのではないか。（案1）の様に施設再編し、入館者が一気に増えることは理解するが、それが全てではないだろう。そこをもう一度問いたい。

さらに加えて言うならば、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館が一つの博物館になることは難しいのではないか。これを一つに包括する館名がない。横浜開港資料館は館名が全国区で定着していることに加え、横浜開港というのが、まさに「横浜らしさ」の象徴となっており、横浜開港資料館という館名を消してまで付ける新しい館名はおそらくないだろう。横浜都市発展記念館は横浜開港資料館に埋没する可能性がある。では、横浜開港資料館だけで横浜の現代及び未来の都市に対しての歴史文化の提言ができるかと言えばできない。やはり、現代都市資料館の様な形の横浜都市発展記念館の役割、つまり関東大震災以降、これからの未来に向けての横浜がどうあるべきかを情報発信していく館として絶対に必要である。横浜開港資料館と横浜都市発展記念館が、機能としては時代区分を明確化したうえで、それぞれの役割を連動させることは必要だが、館としては分けて、役割を果たすべきだろう。

- ・横浜ユーラシア文化館は一体何を目指し、横浜らしさを活かすべきかを、再度お聞きしたい。前回までの委員意見でも、具体的な提言がなされていた。横浜の歴史文化に繋がるユーラシアに特化すれば極めて存在意義が明確化され、市民だけでなく多くの方々にも理解されやすという意見があり、また、現状のままではあまりにも概念が広すぎて、いくら国際都市であっても説明できないのではないか、という趣旨の発言があった。

（指定管理者）

- ・ユーラシアの概念が広すぎて、なかなか理解しづらいということは認識している。その中で、一つの方向性に絞ることは困難である。現在、横浜ユーラシア文化館では3つの方向性を掲げている。一つ目は、市民に良く知られている、人気のあるユーラシアである。エキゾチックな異国情緒を売りにする。現在、エジプト展を開催しているが、エジプトは日本人には非常に人気がある。当初 6,000 人の入館者を見込んでいたが、8,000 人近くもの入館者を得ている。来年はシルクロード展を企画している。これらは「横浜らしさ」とは関係ないが、人気のある企画展ということで残しておきたいものである。二つ目は、知られざるユーラシアである。一般には知られていなくとも、日本と深い関係のある国々や文化について紹介していく。その代表例が今年度実施したフィリピン展であり、在日のコミュニティの方々と連携しイベント等を開催した。当初 3,100 人の来館者を目標としていたが、5,339 人も来館者を得た。この二つについては今年度実績を作ったので、二つのモデルとして今後も進めていきたいと考えている。三つ目は、日本とユーラシアの関係を扱うということである。日本社会の形成には、ユーラシアの影響なくしては語れない。昨今では、東アジアから東部ユーラシアという広い概念の中で日本を見ている。古代史に限らず、前近代社会における日本との関わりもある。そういったことを横浜ユーラシア文化館の職員だけ行うのは難しく、財団全職員の協力を得て進めていきたいと考えている。二つ目と三つ目の方向性

が、国際都市横浜に係るものであり、国際性を出すものと考えている。これら三つの方向性に沿う形で、資料の収集や人脈形成等の戦略を行っていきたいと考えている。

(吉田委員長)

- ・横浜ユーラシア文化館は、設立当初の方向性を変更したり、範囲に狭めるのではなく、基本的には同じスタンスで、より人に知られているテーマや日本との関係についての活動を深める努力を行っていくという認識で構わないか。

(指定管理者)

- ・結構である。

(平川委員)

- ・横浜ユーラシア文化館が意識してコンセプトを明確にしたことによって、外から見ても改善が見られ、今までよりは多くの入館者が得られるようになってきているということであろう。横浜都市発展記念館も同様に、市民にとって時代区分が明確化され、市民から寄贈される資料等により活動していけば結果は出てくる。横浜都市発展記念館は、これからの横浜をどの様につくり上げていくかという大変重要なコンセプトを持っている。今後の横浜市の文化財施設の検討において、施設の再編だけで解決するのではなく、内容を再検討したことは決して無駄ではない。これだけ明確に改善案も出てきた。可能かどうか分からないが、第一段階として(案5)の様な形があり、改善をしたにも係わらず何も効果が出なければ、(案1)等の施設再編を検討していく。そのような段階的な改善が良いのではないか。

(末崎委員)

- ・横浜ユーラシア文化館は、設立の際に命名したわけだが、なぜシルクロード博物館など、ある程度分かりやすいテーマにしなかったのか疑問に思っている。「シルクロード」という用語は広義に解釈すると、「草原の道 Step route」と「オアシスの道 Oasis route」、そして「海の道 Sea route」という、東西と南北の交易ルートを分かりやすく紹介しているということで、設立の時期には広く市民権を得ていた。それよりも更に広く捉え「ユーラシア」としたことが、混乱を招いているのではないか。せめて「東アジア」や「中央アジア」とすればよかっただろう。学芸員の方々もどこまで調査研究等を行ったらいいか分からないのではないか。平川委員が発言されたように、横浜開港資料館は横浜の歴史そのもので知名度もあり、横浜都市発展記念館とは完全に分けた形が良いと考えるが、横浜ユーラシア文化館については、施設の統廃合の前に、もう少し分かりやすい館名へ改名すべきではないかという改善方法もある。

(吉田委員長)

- ・施設を動かさず、館名の変更等による改善方法もあるとのことだが、この点については、「5 その他の提案」へ記載することで構わないか。一方で、横浜市の文化財施設のあり方については、経営改革委員会からの提言があり、当検討委員会として何らかの大胆な方策が求められている。施設を再編することも一つの手段である。今のままで工夫しながら活動を進めることも、なかなか困難である。各案におけるメリット・デメリットについて、簡単には言えないということであるならば、○△×の表記をなくし、並べればよいのではないか。

(永池委員)

- ・横浜ユーラシア文化館や様々な文化財施設の有効性を考えると、子どもたちに教育の中で触れさせていきたい。横浜市内20数万人のこれからの時代をつくる子どもたちに、どの様な観点で文化財に触れさせていくかという点は考慮しなければならない。6年生が校外学習で外出できるのは、1回／年間が精一杯である。現実的に、横浜市歴史博物館へ行くと、横浜ユーラシア文化館へは行くことはできない。3、4年生でも校外学習で行けるかもしれないが、教育的な観点から何度も足を運び、子どもたちが見て、触れて、そこから感心を持つという有効性を考えると、(案1)は大変魅力的である。横浜らしさということも考えたいが、横浜市歴史博物館へ行った時に、横浜ユーラシア文化館のコンセプトにも触れることにより、国際都市横浜としての歴史を学ぶことができる。また、開港期以降の博物館として横浜開港資料館と横浜都市発展記念館があり、ワークショップ等ができる機能があれば、教育課程に組み込むことのできるものが生まれるのではないか。実際に施設へ足を運ばなければ意味がない。(案1)には、教育課程を組む者として、魅力を感じている。

(事務局)

- ・先程、平川委員が発言された内容は理解できる。しかし、博物館や美術館が、機能強化だけで入館者が増えたという例はほとんどない。博物館は存在そのものに意味があると思うが、経営改革委員会から、駅の上のような交通利便性がある場所でも入館者が少なく、抜本的な改革をしなければならないと提言を受け、これを千載一遇のチャンスだと捉え、今ある資源を有効に使えるような抜本的な再編ができないかということで、当検討委員会を設立させて頂いた。通常、駅の近くにある博物館であれば、500人～1,000人／日の入館者があり、現状のままでは改革したことにはならない。各委員から意見を頂戴し5案が提示されたが、(案1)は、学校教育との連携もあり、横浜都市発展記念館が横浜開港資料館へ移転することにより、旧市外電話局の3、4階が収蔵庫を設けることができる。上層階に収蔵庫を設けることにより、先程も議論のあった高波や高潮の被害からも免れる。横浜美術館も中央の棟の上部に収蔵庫がある。旧市外電話局の3、4階に収蔵庫を設けた場合、1階に閲覧室を設けてもすぐに対応ができ、2階には多目的室を設ければ、学校利用の際のガイダンスや、一般利用のワークショップ等も開催することができる。(案1)は、収蔵庫問題も解決でき、施設の活動の広がりもある案である。横浜市歴史博物館は融通すれば、横浜ユーラシア文化館が入るスペースは十分確保することができる。ただし、予算がなければ現状のままになってしまうが、この様な再編できるチャンスは活かしたい。横浜市歴史博物館へ横浜ユーラシア文化館を移転させた際には、末崎委員が発言されたような広い緑地を活かした体験活動等も可能になる。

(平川委員)

- ・入館者を増やしたいという想いは、当検討委員会も同じである。私としては、段階的な改変が必要なのではと考えている。横浜ユーラシア文化館が頑張れば、或いはコンセプトをきちんと整理しそれを館員が望めば、副館長からも入館者数が増加しているとの報告があったため、現状のまま活動を進め、それでも効果が認められない場合は(案1)(案2)(案3)(案4)の様な改変を行うことを検討してはどうか。事務局としては、横浜市歴史博物館のリニューアルに際し、横浜ユーラシア文化館を移転させ

ることが効率的だと考えているのであろうが、横浜市歴史博物館のリニューアル計画の具体的なスケジュールはどの様になっているのか。

(事務局)

- ・平成 24 年度に計画、平成 25 年度に設計、平成 26 年度に施工というスケジュールで考えている。

(吉田委員長)

- ・横浜市歴史博物館と横浜開港資料館のリニューアルは、当検討委員会や他の委員会等とは関係なく、スケジュール通り実施されるのか。

(事務局)

- ・その様に実施したいと考えている。

(平川委員)

- ・最初の計画、設計の段階で横浜ユーラシア文化館を移転させるとなると、決定を急ぐ必要があるということか。

(事務局)

- ・もしその様なスケジュールで行うなら、経費もかからず効率的である。

(西野委員)

- ・(案 5) だけが (案 1) ~ (案 4) の表と離れているのは何故か。分ける必要はないのではないか。

(吉田委員長)

- ・P. 15 にもあるように、施設の再編を行わないということを表しているのではないか。

(西野委員)

- ・その事は理解できる。しかし、経営改革委員会からは抜本的な改革を求められているが、施設の再編については前提条件ではない。平川委員の発言を含めて、整理するならば、再編のステップが一つのキーワードとなる。第一ステップとしては、(案 5) が一番上に来ることになり、次いで、改革のステップとして各案を位置付けてはどうか。横浜市歴史博物館のリニューアルは 3 年後に行われるため、(案 5) は今すぐにも着手できる話であり、3 年後にどの様にするか、各案を時系列で整理すればこれまでの議論も生きてくる。

(長島委員)

- ・本来ならば、それぞれが単独館で活動できることが理想である。末崎委員が発言された様に、横浜ユーラシア文化館は館名自体が適していないと感じている。ヨーロッパ大陸とアジア大陸を合わせてユーラシアなのに、市民から見れば、なぜエジプト展が開催されたのだろうと疑問に思ってしまう。そのような単純な地理的な分け方ではないことは、当検討委員会を通じて理解できた。しかし、素人的にみても、これらが困惑の原因となっており、横浜ユーラシア文化館の一番の課題なのではないか。横浜ユーラシア文化館は、これまで通りでは絶対にダメである。市民にとっては、江上波夫氏のコレクションが基になって横浜ユーラシア文化館が設立されたこと、ユーラシアとっているのになぜエジプト展が開催されるのか、横浜そごう等で開催されるエジプト展とは何が違うのかなど、理解しにくいだろう。横浜ユーラシア文化館のあり方を根本的に考え直すことで、他の博物館が生きていくという考え方もある。施設のあ

り方について、時系列で整理し考えていくことも必要だが、横浜ユーラシア文化館が設立されて約8年が経過するのにこの様な状況であれば、改変も必要なのではないか。世の中はどんどん変わってきている。現状の少ない入館者の増減を議論している段階ではないと、市民の一人として思う。横浜ユーラシア文化館の資料は、大切なコレクションでもあるため、それらを活かすためのあり方を当検討委員会において議論し、答えを出す必要がある。

(吉田委員長)

- ・当検討委員会からの提言として、改革のステップとして5案のイメージ図を示すことは構わないか。また、現イメージ図の(案4)と(案5)の間は開けない。

→特に異論なく、了承された。

- ・5案出ているので、多数意見からまとめたい。改革のステップとして、どの様な順番で整理すべきか。つまり、先頭に置く案はおのずから委員会として最優先の案ということになるので、慎重に考える必要がある。

(平川委員)

- ・ステップということが大事で、答申案としては一番望ましい。まずは、実行力のあることから始め、次に予算が伴うような案となるだろう。また、横浜ユーラシア文化館と横浜都市発展記念館に対し、館名の変更について議論がなされたが、館名の変更はそんなに簡単なことではない。それらを踏まえると、当検討委員会からの提言としては、大変大きなものとなる。しかも、横浜市歴史博物館と横浜ユーラシア文化館は学術研究面で連携し、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館が時代区分を明確化していくということは、これまで懸案であり、市民にとっても一番見えない部分であった。それを提言していくということは、非常に大きなことである。この提言(案5)をきちんと広報することができれば、市民にとっても変わったのだなということが伝わり、最初のステップとして有り得るだろう。その先のステップとして、(案1)と、もう一つくらいの案を付けて、施設面での次の改革を一応は提言していく。この様な形であれば賛同できる。

(永池委員)

- ・平川委員の意見に賛成である。まず、スタンスとして(案5)を最初に置き、整理した段階で施設面での改変としてどの様な形があるか進めることが重要である。もう一つ重要なことは、横浜市の大変な財政難の状況の中で、予算が確保できるチャンスを活かさなければ、良案を持っていても長年チャンスに恵まれないこともある。現在、そのチャンスの時期であるからこそ、掴まなければならない。理念や理解から、次のアクションを起こすところまで進んで頂きたい。

(嶋田委員)

- ・横浜開港資料館と横浜都市発展記念館が一体化することについて、基本的に横浜開港資料館の施設を利用するということが、実際に入り込めるのか。

(事務局)

- ・現状のままでは、横浜開港資料館にスペースはない。横浜都市発展記念館と一体化するには、横浜開港資料館の収蔵庫を旧市外電話局へ移転させることが前提条件となる。

(嶋田委員)

- ・現在の開港資料館の収蔵庫は、展示用スペースとして適しているのか。また、完全に横浜都市発展記念館を盛り込めるという保証がなされない限り、議論を進められないのではないのか。

(西野委員)

- ・前回の資料3に示されているものが、問題なければ可能だろう。

(吉田委員長)

- ・嶋田委員が心配なさっているのは、スペース的な問題か。

(嶋田委員)

- ・構造等について、物理的に可能なのかという点である。

(事務局)

- ・現在も横浜開港資料館新館3階は、収蔵庫による荷重がかかっている。それらを取り外し展示室とするため、可能である。また、地下の閲覧室も企画展示室とする。そして例えば(案1)であれば、閲覧室を旧市外電話局へ移転し、その上に収蔵庫を移転させれば、一体的に利用できる。

(嶋田委員)

- ・横浜開港資料館と横浜都市発展記念館を一体化するという事は、館名も変更することになるのか。

(事務局)

- ・館名を変更した方が良いということであれば、変更することになるだろう。館名については、その際に改めて御意見を頂戴したい。

(嶋田委員)

- ・本日は、提言として最終的なまとめまで行うのか。

(吉田委員長)

- ・結論として、案を減らすにしても、これまでの議論の中で各案が提示されており、文化財施設の方向性についての合意は得られている。後は、段階的なステップとしての各案の順番をどうするかという問題である。計5回開催した会議としての一定の結論は出ている。

(事務局)

- ・館名の変更については、ステップが進み、その段階に達した際に改めて検討する議論になる。今の段階では、各案の順番を整理して頂きたい。

(嶋田委員)

- ・平川委員が発言された段階的という案は、どこに入るのか。

(平川委員)

- ・先程、西野委員も発言された様に、まずは(案5)に着手することが先決ではないだろうか。その後に、上手くいかないならば施設面での改革を行う次のステップに進むといった条件付きの答申案はあり得るだろう。そうすれば、おそらく当局も説明ができるのではないのか。

(嶋田委員)

- ・それならば了解である。

(澤野委員)

- ・5案について、優先順位と誤解されないように、ステップであると分かるように第一段階、第二段階という様にする必要がある。ステップの順番としては、最初に（案5）があり、次に施設面での改革案として（案1）（案3）（案2）（案4）の様にまとめるべきではないか。

（吉田委員長）

- ・（案5）→（案1）→（案3）→（案2）→（案4）ということか。

（澤野委員）

- ・ステップ1＝（案5）、ステップ2＝4つの案の選択肢、というイメージである。

（吉田委員長）

- ・ステップ2となる4つの案には、序列は付けないということか。

（永池委員）

- ・ステップ2となる案については、全てを並列にしてしまうと、これまで議論を重ねてきた意味がない。ステップ2としては、（案1）になるだろう。

（澤野委員）

- ・メリット・デメリットを記載しておけば、案の軽重は判断できる。

（事務局）

- ・現実的な流れとしては、案5の次は案1と進み、整理させて頂いて構わないか。まず、ステップ1＝（案5）により施設の中で改善を図り、施設目的の達成を図っていく。その後、次のステップに進むとすると、ステップ2＝（案1）として施設そのものを再編する改革に移行する。また、当検討委員会にて出された（案2）（案3）（案4）については、報告書の中で触れることとして整理したい。

（末崎委員）

- ・私はそのような考えでいいと思う。

（吉田委員長）

- ・賛同の方もいるがこのまとめ方で良いか。改めて整理すると、まず現状の中で努力すべきというステップ1＝（案5）があり、次にそれでも上手くいかないのであれば、ステップ2＝（案1）を中心に抜本的な施設再編に移行する。そして、ステップ2の代替案のバリエーションとしては、意見として他の3案をまとめておくということによるのか。

→特に異論なく、了承された。

5 その他の提案

（吉田委員長）

- ・館名の変更や周知のための広報等について、記載しておくべきか。

（平川委員）

- ・館名については、ぜひ提言として記載しておいて頂きたい。特に、横浜都市発展記念館について、記念館というものは寄贈により成り立つものがほとんどである。震災後の横浜のあり方、これからの横浜のあり方を考えるための資料館という意味では、現代都市資料館であれば横浜開港資料館と対になり、館名として相応しいのではないか。横浜開港資料館が開港期から関東大震災までを扱い、一方で、震災後の新しい横浜の

都市形成、これからの横浜はどうあるべきかを考える資料館であれば、誰にでも分かるようになる。実際に議論し決めるのは今後としても、提言として記載して頂きたい。横浜ユーラシア文化館についても、具体案を提示しなくても館名を再検討すべきであるという旨を記載して頂きたい。

(末崎委員)

- ・横浜ユーラシア文化館の館名については、例えば、シルクロード博物館等が考えられる。

(吉田委員長)

- ・提言としてまとめの方向は決定した。最終的な提言書については、一度委員各位に確認を取り、ご意見があれば汲み取って私がとりまとめる、ということで構わないか。
→特に異論なく、了承された。

(吉田委員長)

- ・委員各位には、御礼申し上げます。10名の委員が現状や課題を踏まえて議論頂いたことは、大変意味のあることであった。これを踏まえて横浜市教育委員会や横浜市ふるさと歴史財団も取り組んで頂けると有り難い。

4 その他

(事務局)

- ・委員各位には、厚く御礼申し上げます。活発な委員会であり大変勉強になった。貴重なご意見を頂き、是非実現できるよう努めていく。